

氏 名：高 橋 美穂子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

報 告 番 号：甲第124号

学 位 記 番 号：博第120号

学位授与年月日：令和7年3月18日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論 文 題 目：看護師が患者の「そばにいる」こと：

精神科病棟におけるエスノグラフィーを通して

“Being There” for Patients: Ethnographic Study of Nurses' Practices in a Psychiatric Ward

論 文 審 査 員：主査 吉 田 みつ子

副査 松 本 佳 子（正研究指導教員）

副査 本 庄 恵 子（副研究指導教員）

副査 新 田 真 弓

副査 小 宮 敬 子

論文審査の結果の要旨

審査の概要

本論文は、入院が長期化する日本の精神医療において、対人関係に苦しみ、生きにくさを抱える患者との間で、看護師が「そばにいる」という関わりがどのように行われているのかを探求したものである。

これまで「そばにいる」という関わりは、精神看護領域に限らず重要なケアとして探求され、そばにいる目的や帰結、その重要性が論じられてきたが、患者と看護師の相互作用において何が起きているのかを探求した研究はみられていない。本研究は、患者と看護師の実際の相互作用において、そばにいるという関わりがどのように行われているのかを精神科病棟でのフィールドワークを通して明らかにしている。フィールドワークは、関東圏内の精神科単科病院の1つの病棟で行われ、同意を得た4名の患者、看護師32名の相互作用について参与観察を行い、6名の看護師にフォーマルインタビューを実施している。また、研究者自身も患者と関わり、感情や身体感覚などを通して、EmicとEticの視点を突き合わせデータを収集している。

研究の結果、4名の患者と看護師との間で、そばにいることの詳細が描き出された。これらの結果をもとに、考察においては、看護師たちは、目に見える成果や変化を早急に求めるのではなく、患者の状況が良くわからない時にこそ患者のそばに行くという関わりが生まれていることが明らかになった。看護師が患者のそばにいるという関わりが可能になる状況には、看護師が患者を脅やかさない姿勢や態度をもち、患者との間にある不確かさの中にとどまる「negative capability」が重要であることが示唆された。看護師が患者のそばにいることは、看護師が患者の体験している世界を垣間見る体験でもあり、その積み重ねによって患者の新たな姿が見え、さらなる関わりの糸口にもなっていた。一方で、患者との関わりにおいて看護師の中に否定的な感情が沸き起こることによって、患者のそばにいらなくなるという現象が生じていることが考察され、看護師が患者のそばにいるために必要な力、病棟環境などについて実践への示唆がなされている。

論文審査においては、本論文がこれまで明確に言語化されてこなかった、「そばにいる」という看護師の関わりが、フィールドワークという手法によって、患者との相互作用の中で豊かに記述され、明らかにされた点が評価された。予備調査を含め1年4か月にわたって週1回のフィールドワークが行われ、現象を明らかにしようとしている点も評価された。

本論文は、精神科看護領域にとどまることなく、様々な現場での看護、介護、支援が行われる場においても重要な知見となりうると期待できる。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。